

小島ゆかり ◎歌人

辻原登 ◎作家

長谷川權 ◎俳人

第9回 東海大学湘南連句座談会



六曲一双 『照柿の巻』(上)

十月十三日に、東海大学湘南キャンパスで開かれた湘南連句座談会は、三人の選者の「発句」「脇句」「第三」に続けて、参加者が句を付けていく会場参加型の催し。連句の楽しさを味わった座談会の模様を再現する。

記憶の夕暮れを名づけて

長谷川 これより第九回湘南連句公開座談会を始めたと思います。今年が初参加の方もいらっしやると思いますが、簡単に説明いたします。

今回は「照柿の巻」と題して、六曲一双の歌仙を巻いていきます。

すでに第三までは詠んであります。発句は辻原登さん、脇を付けたのが私、長谷川權、そして第三が小島ゆかりさんです。第四句からは、会場の皆さんに詠んでいただき、その中から私のほうで数点選び、辻原さんと小島さんに最終的な入選の一句を決めていただきます。

では発句から第三までの句について、簡単に解説していきます。辻原さん、お願いいたします。

辻原 湘南連句は例年、五月か六月に開かれることが多く、秋の開催は今回が初めてです。昨年の「柏餅の巻」での発句は長谷川さんがお詠みになりましたが、三・一の後だったこともあり、東日本大震災への思いが色濃く反映された句になりました。

●第9回東海大学湘南連句

六曲一双 『照柿の巻』

【表六句】

発句 〈秋〉 照柿と名付けて仰ぐ西の空 辻原 登

脇 〈秋〉 腹が鳴るのも馬肥ゆる秋 長谷川權

第三 〈月〉 犯行の決め手となりし月夜茸 小島ゆかり

四句目〈雑〉 呵呵大笑の村会議員 金澤道子

五句目〈冬〉 炬燵猫足の臭さに首を出す 石川桃瑪

六句目〈雑〉 i P S の新薬を待つ 宇佐美正治

七句目〈夏〉 はじまりは子供のころの水遊び

八句目〈雑恋〉 お願いだから一緒にきてよ 竹田信弥

九句目〈雑〉 深夜までちぎれボタンをてのひらに 田中益美

十句目〈春〉 風が吹き荒れ春を報せる 山城むつみ

十一句目〈花〉 石畳花びらの跡たどりゆく 林沙織

発句 〈春〉 起きよ起きよと振る種袋 寺田幹太
金澤道子

そういつたことを考えながら、秋らしい、広い空を描くような句ができないかと思いました。天空を見上げたり、逆に下界を眺めたり、または飛び回ったりする、そんな句にしたかった。

そこで思い当たったのが、夕焼けです。子供のころから、私は夕焼けが好きでした。郷里は紀伊半島で、西側には紀伊水道が広がり、彼方には四国が見えます。浜辺で暗くなるまで遊んだ幼いころ、夕焼けに燃える西の空と夕陽に染められた海面を、何度も目にしましたのですが、このときの光景が、記憶の中に何層にもなつて積み重なっているのです。

夕暮れの色を表すには、茜色や紅色、朱鷺色など、さまざまな言葉がありますが、私が考えたのは、よく熟した柿、つまり照柿の色です。染料の色にもありますが、あの独特な赤みがあった黄色である照柿を、私の記憶の夕暮れの名にしようと思ひ、

・照柿と名付けて仰ぐ西の空
と詠みました。

長谷川 夕焼け空にはいろいろな赤が混じり合っていて、豪華絢爛でありながら、ちよつと寂しい感じもする。その様子を照柿に込めて、西の空を仰ぐという発